# 独断一束

岸田國士

## 思想

芸術としての思想の魅力は、芸術家が、その思想を、軽く掌の上にのせてゐる時にのみ、われわれの心を動かす。

## 時代意識

時代意識がない、それで、その作品に、なにか大事なものが欠けてゐるやうに思ふのは、創作を深呼吸と間違へてゐるのだ。

健康な小児の、静かな寝息がわからないか。慌てまいぞ、藪医者！

去年の星は、断じて、今年の星ではない——真面目に。

## 近代の日本

機智が重い靴を穿き、ファンテジイが片肌を脱ぎ、下らないことをむきになつて下らながる近代の日本。

## 喜劇

喜劇のわからないことは最も喜劇的である——悲劇のわからないことが、屢々最も悲劇的であるやうに。

## 遊戯

芸術は遊戯に非ずと云ふもの、遊戯も亦芸術たり得る論理を知らなければならない。

## 鑑賞

知つてゐることしか解らない――これが俗衆の「眼」である。

文芸の鑑賞は、もう一歩先から始まる。

## 新しいもの

旧いところがある、かう云つて新しいものを貶さうとする。
新しいところがある、と云つて、旧いものが貶せるか。

## 頭と心

頭で書くのがいけないさうである。
心は、それを聞いて、悲しむだらう。さもなければ、怒るだらう。
頭と心とは、それほど別々なものではない。

## ある種の批評家に

——金を出せ。

——やる金はない。

——着物を脱げ。

——おれは裸でゐなければならない。

——貴様はおれの持たないものを持つてゐる。貴様はおれに何かを寄越す義務がある。

——何かを……それはわかつてゐる。だから、おれは、こんなに笑つてゐるぢやないか、泣きたいほどだのに。

「人生よ」と叫ぶ若き作家に

——大丈夫ですよ、お母さん、××博士が、きつと治(なほ)すと云ひました。

——いゝや、今度は駄目だ。

——駄目ぢやありません。

——今年は、お父さんの三年忌だ。

——此の××日です。

——×月××日……お前は知らないんだね、三年忌には仏が迎へに来るといふことを……。

——仏……お父さんがですか。

——あたしは、どうしても、まだ死にたくない。

――お母さん、その涙を拭きませう。（心の中にて）
父上よ、耳を塞いでゐて下さい。

わが二三の読者に

――お父ちやん、遊ばない。
――何にして。
――ピンポン。
――うむ。もう少しあつちで遊んでゐな。今、お父さんは、仕事があるんだ。
――仕事……どんな仕事。
――いゝから、しばらく、向うへ行つておいで。

――だつて、母ちやんが……。

――よし、よし、お前は色んなことを覚えるな。どれ、その母ちやんは何処にゐる。

底本：「岸田國士全集19」岩波書店
1989（平成元）年12月8日発行
底本の親本：「言葉言葉言葉」改造社
1926（大正15）年6月20日発行
初出：「文芸時代　第二巻第二号」
1925（大正14）年2月1日
入力：tatsuki
校正：Juki
2009年3月16日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。